集英社版
世界文学
全集
85
パール・バック

集英社版
世界文学全集

85

大地 II

パール・バック

訳＝小野寺健

集英社

© 1978 Shueisha Printed in Japan

集英社版 世界文学全集 85

大地 II

一九七八年八月二十五日 印刷
一九七八年九月二十五日 発行

訳者 小野寺 健

編集 株式会社 綜合社
一〇一 東京都千代田区神田神保町三—六—五
電話 (〇三) 二三九—三八一一

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社
一〇一 東京都千代田区一ツ橋二—五—一〇
電話 出版部 (〇三) 二三〇—六三六一
販売部 (〇三) 二三〇—六一七一

印刷所 凸版印刷株式会社

0397-168085-3041

落丁・乱丁本はお取り替えいたします
定価は帯に表示されています

目次

大地 Ⅱ　小野寺 健訳　3
後記　437
解説　小野寺 健　439
年譜　449

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

大

地

II

19

その翌月、傲然とかまえていた王虎にとって、人づてに聞いたのでは信じられないような事態がやって来た。大軍閥が戦争をはじめて国が割れたという話がつたわり、戦争熱が国中にみなぎったのである。この熱につられて、戦争好きのけちな男たちがいたるところで動き出した。のらくらして職もないもの、職はあっても働くのが嫌いな連中、冒険なら何でもという手合や、親とそりが合わない息子たち、賭博ですった男、その他ありとあらゆるけちくさい不平分子がこの機に乗じて登場し、功名を立てようと動きだしたのだった。

今では王虎が老知事の名をかりて支配しているこの地方でも、こうした叛徒たちが徒党を組むと、頭に黄色い鉢巻をしているので「黄巾団」と称して、あたりを荒らしまわるようになった。ただ、はじめのうちはびくびくとけちくさいもので、通りすがりに農家から食物を強要するとか、村の宿屋に入りこんで完全な無銭飲食をするなり少ししか払わなかったりといった程度だった。ものすごい形相でにらみつけたり喧嘩腰で声を荒らげたりするものだから、宿の主人も騒ぎになるのを恐れて、なるべく泣き寝入りをしたのである。

ところが、この黄巾団は数がふえるにつれて大胆になり、こんどは銃を手に入れようとしはじめた。さいしょは脱走兵の持ってきたわずかな銃しかなかったからである。銃が手に入ると彼らはますます大胆になって、民衆のあいだを略奪してまわった。もっとも、そうなっても大都会へ近づこうとはせず、もっぱら小さな村だけを荒らしまわっていた。ついに、百姓の中でも勇気のあるものが幾人か王虎のところへやって来て、野放しにされているおかげでこの匪賊たちが大胆になり、夜民家を襲っては、望みどおりのものが手に入らないと百姓一家を皆殺しにして意に介さないという事情を報告した。けれども、王虎はこの話に半信半疑だった。というのは、密偵を放って百姓たちに事情を訊かせても、百姓たちの中には臆病なものがいて、何も話そうとせず、頭から事実を否定したからである。だから、王虎は事を軽く考えて、しばらくは何の手も打とうとはせず、ひたすら彼自身が大戦争に参加する意志を宣言する好機がくるのを待っていたのだった。

だが、やがて焼けつくような夏が来て、多数の軍団がこの地方を通っては南へ進軍して行く日が続くようになると、その兵隊の中からふらふらと匪賊の一味に加わるものも出

てきて、匪賊たちはますます数がふえ、大胆になっていった。それにこの季節になると、この地方では高粱が大きく育って絶好の隠れ場になるものだから、彼らはいっそう大胆不敵になり、その手に負えない跳梁ぶりに、人びとは街道以外、集団をつくらずには歩くこともできないほどになった。

事態がここまで来ていることを王虎がはたして知っていたかどうか、それは心もとない。というのも、彼はいささか部下の思うままになっていて、密偵とか腹心とかの考えをそのまま信じるほかなかったからである。そしてこの部下たちにすっかりおだてられて、自分の前に立ちふさがるものなどいはしないと思いこんでいたのだった。ところがある日のこと、西のほうの村から農民の兄弟が二人、麻の袋をさげてやって来た。兄弟はこの麻袋の中を誰にも見せようとはせず、何を訊かれても頑としてこう答えた。

「これは将軍さまにさしあげる袋です！」

そこで、これは王虎への献上品を持ってきたのだなと思った衛兵たちが門内へ入れてやると、彼らは聴聞室へ入った。王虎はちょうどそこに坐っていた。よくここへ出てくる時間だったのである。王虎の前に出た兄弟はふかく頭をさげると、あとはよけいなことは言わずに麻の袋をあけ、中から二人分の両手をとりだした。片手は労働にやつれ、こちこちになって、黒い皮膚もひび割れた老婆の手、片方は掌に鋤の柄の握りだこができた、これも老人の男の手だった。この四本の手を、二人の兄弟は、もう血が黒くかたまっている切り口のほうをつかんで高くかざした。そして四角ばった実直な顔立ちをした中年の兄のほうが、真剣な、怒りに燃えた表情で言ったのだ。

「これはわたしの年老いた両親の手です。二人とも死んだのです！　二日前に匪賊どもがわたしたちの小さな村になだれこんできて、家には何もないと父が叫ぶと、父の両手を切り落としました。さらに、母が勇敢に奴らを罵ると、母の手も切り落としたのです。わたしたち兄弟は畑に出ていたのですが、女房たちが逃げ出して、悲鳴をあげながらとんできました。そこでわたしたちは乾草に使う熊手を握って駆けつけたのです。しかし、匪賊はもう逃げたあとでした。奴らはせいぜい八人から十人くらいで、しかも両親は年寄りでした。それなのに、村の連中は後難を恐れて誰一人助太刀しようとしなかった。将軍さま、わたしたちはあなたさまに税金をさしあげています、それも義務としてお国に払う税金ばかりか、もっと重い税金を払っています。土地にも、塩にも、すべての売り買いにも税金を払っている、それも匪賊から守っていただくためです。いったい、わたしたちはどうすればいいのです？」

こう言うと、兄弟は年取った両親のやつれこわばった両手を高く振りかざした。

ふつうこういう地位にいる人間だったなら、兄弟のこんな大胆不敵な言葉には激怒したことだろう。だが、王虎は怒らなかった。それどころか、彼はこの話を聞いて仰天し、農夫の大胆さよりも、自分の統治下でこんな事件が起こったということに激怒して、大声で部下の隊長たちを呼びつけた。彼らはつぎつぎに命令を聞きつたえてこの部屋に集まり、やがて五十人ほどになった。

王虎はタイルの床に物体となって無残にころがっている手をみずからとりあげると、全員に見せながら言った。

「これは善良な農民の手だ。息子たちが畑に出ている真っ昼間に略奪があって殺されたのだ！　この盗賊どもをまっさきに討とうというものは名乗り出よ」

目をむいてこの手をにらんでいた隊長たちは、自分たちの統治する土地で略奪をはたらいた匪賊たちの大胆不敵さに激昂してたがいにがやがや言い出すと、あちこちでこんな声をあげた。

「われわれが支配する土地で、こんなまねをさせておいていいのか？」――「けしからん盗賊どもを、われわれの領地にのさばらせておけるものか」そしていっせいに叫ぶのだった。

「討伐のご命令を！」

王虎はここで兄弟をかえりみて言った。

「安心して家に帰れ。明日はこのものたちが行く、まかせておけ。わしも匪賊の頭目をつきとめ、豹とおなじように始末するまでは手綱をゆるめん！」

すると弟のほうが口をひらいた。「閣下、奴らにはまだ頭目はいず、ただみんな名前が同じというだけの、小人数の徒党がうろついているだけだと思います。いずれは一つにまとめてくれる強い頭目を探しているところなのです」

「それならば、蹴散らすのはなお簡単だ」王虎は言った。

「だが根絶やしにするのはむずかしい」これは兄のほうのぶっきらぼうな科白だった。

二人の兄弟はそれでもまだ、何か言いたいことがあるのにどう言えばいいのかわからないといった様子で、動こうとしない。その態度にしばらくいらいらしていた王虎は、彼らが自分を信用していないのだと気がついて、いささか腹が立ってきた。そこで彼はこう言った。

「おまえたちは、おれが豹を殺したほど強い男だということを疑うのか。当時は大変な匪賊で、二十年以上もおまえたちを食いものにしていた相手だったのだぞ」

兄弟はたがいに顔を見合わせたが、やがて兄のほうが唾をのみこむと、重い口をひらいた。

「閣下、そうではありません。ただ内密にお耳に入れたいことがあるのです」

王虎はまだその辺に立っている隊長たちのほうを見ると、退出して部下たちに討伐の準備をさせろ、とどなりつけた。

いつも王虎の身辺にいる一人二人をのぞいて彼らが退出すると、兄のほうががばと平伏し、タイルの上に三たび頭をすりつけてこう言いだした。

「閣下、お怒りにならないでくださいまし。わたしどもは貧乏人なので、お願いごとがあっても、ただお願いするばかりで、充分なものをさしあげる余裕はないのでございます」

王虎は驚いた。「何の話だ？　おれは自分のできることなら、何か頼まれたからといって賄賂を要求したりはせんぞ」

男は哀願するように言った。「今日わたしどもがここへ来ますのにも、村の連中はしきりにとめて、もし兵隊さんをよこしていただくことにでもなったら、そのほうが匪賊よりもっと災難だ、と言ったのです。兵隊さんは、わたしたち働かなくては食えない貧乏人からいろんなものを召しあげる、というのでございます。匪賊たちはやって来てもすぐ出て行くが、兵隊となるとわたしらの家に住みこんで娘には目をつける、冬の貯えにとってあるものは食っちまう、しかも相手は武器を持ってるから、わたしらは逆らえないのです。閣下、もし閣下の兵隊さんもそんなことをなさるんでしたら、どうぞよこさないでくださいまし。災難は運命と思って辛抱いたします」

王虎は善人だったから、この話を聞くとかんかんになって席をたち、もう一度隊長たちを呼びつけた。彼らが三々五々ひきかえしてくると、王虎は紫色になった顔の眉毛をぴくぴくさせながら、噛みつくように言った。

「おれの領地の広さはたかのしれたものだ。兵隊は三日のうちにもどってこられる。かならずそうするのだ！　一人といえども三日以上ぐずぐずしていてはならん。万一住民の家に泊りこむようなものがあれば殺す！　匪賊を討伐して根絶やしにしたなら、銀貨と酒と食物の褒美を与える。だが、おれは頭目とはちがう、匪賊を飼っているつもりはない！」こう言って彼が隊長たちを凄まじい形相でにらみつけると、彼らはあわてて命令を守ることを誓った。

これだけのことをすませた王虎は、固い約束とともに農民兄弟を帰した。彼らは両親の手を拾って、もう一度うやうやしく麻の袋におさめた。いずれ五体そろった形で埋葬するためである。彼らは王虎をほめたたえながら村に帰って行った。

だが二人の兄弟を帰してから、あらためて自分のした約束について考えてみると、王虎は、温情のためにとんだことをしてしまったと、いささか後悔せずにいられなかった。彼はすっかり熱のさめた思いで自室に坐りこんでいた。あんな匪賊相手のいざこざなどで、せっかくの兵士や銃を失いたくはなかったのである。それにどこの軍隊にもかなら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ずいるものだが、自分の部下のなかにも、怠けもので、うまい口があれば鞍替えしようと思っている兵隊がすこしはいること、そういう連中が匪賊どもの甘言にのせられて、銃ごと逃亡しかねないこともわかっていたのである。彼はすっかり深刻になって、これは性急にすぎた、あの兄弟に見せられた証拠の腕にあまり動揺しすぎたと考えこんでしまった。

こうして坐っているところへ伝令が手紙を持って入ってきた。兄、商家の王からの手紙である。端を破って中身を出すと王虎は読みはじめた。兄はまわりくどい言葉をつらねて、銃が手に入ったこと、ある定められた日に定められた場所に置くが、北の大製粉工場へ運びこむ小麦の袋にかくしておくことを説明していた。

王虎がこれほど困りはてたことはなかった。なんとか手段を考えて銃を運ばなければならないというのに、兵隊は匪賊の討伐で各地に散り散りになっている。彼は椅子を立とうともせず、運命を呪っていた。と、そこへ愛する女が入ってきた。珍しくおだやかで物憂げな歩きかたである。というのも今はちょうど夏の暑い盛りだからで、彼女はわずかに白い絹の上衣とズボンしか身につけていず、その上衣も喉もとのボタンをはずしていた。いかにも柔らかでふくよかな、顔よりもさらに白い首筋がのぞいていた。

運命を呪って思い悩んでいたというのに、彼女を見てその美しい喉もとに惹きつけられると、王虎は一瞬悩みも忘れてその白い首筋に指をふれたくなり、彼女がそばへ来るのを待った。彼女はそばまで来るとテーブルにもたれて、彼が手にしている手紙を見やりながら言った。

「そんなに顔色を変えて怒ってらっしゃるなんて、何か困ったことでもあるの？」そこでしばらく黙ると、彼女はちょっと、甲高い声で笑った。「わたしのせいじゃないでしょうね？　そんなにこわい顔をしてらしっちゃ、殺されるのかと心配にもなりますわ」

王虎は黙って彼女に手紙をさしだしたが、目は彼女のあらわな喉もとと、そこから胸につづくなめらかなふくらみから放れようとしなかった。結婚後まだまもないというのに、彼は何でも彼女に話すようになっていたのである。彼女は手紙を受け取って読む。彼は彼女が字を読めるのを誇らしく思い、手紙にかぶさるようにして、薄いくっきりした唇をかすかに動かしながら読んでいるその姿を、何よりも美しいと思うのだった。今では髪も櫛を入れて油をつけ、首筋でまとめて黒い絹のネットをかぶせている。耳には金の耳環がさがっているのだった。

彼女は読みおわった手紙をまた封筒に入れて、テーブルの端に置いた。王虎はそのあいだも、ほっそりした手の、すばやい軽やかな動きをじっと見ていたが、やがてこう言った。

「どうやってこの小麦の袋を運びこめばいいか、わからないのだ。何か策略か、武力を使って運びこまなくてはならないのだが」
「簡単ですよ」女はあっさり言った。「策略も武力も簡単です。わたしにはもう、手紙を読んだとたんに計画ができました。兵隊たちを匪賊のように変装させればいいのですよ。近ごろ世間の噂になっている匪賊のふりをさせて、勝手に小麦を奪ったようにみせかけるのです。あなたのしたことだなんて、誰が気がつくものですか！」
彼女がこう言うと、王虎はいかにも頭のいいその計略にこんどもまた声もなく笑い、彼女を抱きよせた。彼女が部屋に入れば衛兵はかならず外へ出ることになっているので、部屋には二人しかいなかった。彼はいかつい両手で思うまま柔らかな肉体にさわりながら言った。
「おまえのように頭のいい女は見たことがない！　豹を倒したあの日に、おれは幸運に恵まれたわけだ！」
心ゆくまで妻の身体を楽しんだ彼は、部屋を出ると大声で鷹を呼び、こう言った。
「おれたちの銃が、三十マイルばかり先の、鉄道が交叉するあたりに置いてある。北部の製粉工場に荷揚げした小麦の袋にみせかけてあるからな。五百人集めて武装し、匪賊のような服装をしろ。その上で袋を奪い、巣窟に運びこむようにみせかけるのだ。だが、近くに荷馬車と驢馬を用意しておいて、小麦ごといっさいがっさいここまで運んでこい」
豚殺しはどんぶりほどもある両の拳だけが頼りだったが、鷹のほうは利口者で頭をつかう策略が頼りだったから、こういう狡猾な仕事なら大喜びで承知した。王虎はさらにつづけた。
「すべての銃をここまで運びおわったら、おまえにかならず報奨をとらせるばかりでなく、兵隊一人一人にもそれぞれの働きに応じて報奨をとらせる」
こう伝えると王虎は自室にもどった。女はすでにいなくなっていたが、彼は彫刻のある肘掛椅子に腰をおろした。暑さをしのぐように、尻のあたるところには葦が張ってある。猛烈に暑くなってきた室内で、剣帯をはずし、喉もとをゆるめると、彼はゆったり椅子に掛けたまま彼女の喉と、さらに胸につづくそのふくらみを思い、その肉の柔らかさ、肌のなめらかさに感嘆していた。
兄の手紙がなくなっていることには、まったく気がつかなかった。女は手紙をとって衣服のふところ深く突っこんでしまったのである。そこまでは、彼の手もさぐらなかったのだった。
鷹が出発して半日になるころ、寝る前に夜風にあたって涼もうと一人で外へ出た王虎は、道路に通じる脇の門にちかい中庭を歩いていた。外を通るものはめったにいない。

通るとしても日中だけの通路である。歩いていると、蟋蟀の鳴く声が聞こえた。はじめはさまざまの夢想にひたったまま、彼の耳には蟋蟀の声などまったく入らなかった。だが、いつまでも鳴きやまないその声がようやく耳にとどくと、ふと、今は蟋蟀の鳴く季節ではないことに気がついた。彼は何となく不思議に思って、蟋蟀のひそんでいる場所をさがしてみた。声が聞こえてくるのは門のほうである。ますます濃くなってくる闇の中をすかしてみると、門のかたわらに妙なかっこうでうずくまっている人影がある。剣に手を掛けて闇の中を近づいてみると、痘痕の甥が青い顔でこちらを向いていた。若者は喘ぐようにささやいた。

「声を立てないで！　わたしがここにいることは叔母さんに言わないでください。うまく通りへ出て来てくれませんか、さいしょの分れ道のところで待っています。お話があるのです、ぐずぐずしている暇はありません」

こう言うと若者は影のように姿を消した。だが一人きりだった王虎は一刻の猶予もしなかった。すぐその跡を追うと、自分のほうが先に約束の場所へ行った。やがて甥が塀ぎわの暗闇をつたってやって来るのを見た彼は、驚いて言った。

「そんな負け犬のようなかっこうでこそこそするとは、いったい何に怯えているのだ？」

すると若者は言った。「しっ――遠くまで使いに行けと言われているのです――こんなところにいるのを叔母さんにみつかったら、だいたい叔母さんは利口だから誰かに監視させていないともかぎりません――ぼくが喋ったら、殺すと言われているのです。叔母さんにおどかされたのは今度がはじめてではありません！」

これを聞いた王虎は呆然として口もきけなかった。ものも言わずに甥をかかえあげるようにして横丁の暗がりにひきずりこんだ彼は、事情を話せと言った。すると若者は王虎の耳に口を押しあてて言った。

「叔母さんがこの手紙を誰かに届けろと言ったのです。しかし誰なのかはあけてみなかったのでわかりません。叔母さんはぼくに字が読めるかと訊きました。ぼくは読めない、田舎育ちだから読めるはずがない、と答えたのです。するとこの手紙を渡して、今夜北の町はずれにある茶館で待っているある人に届けろ、と言いました。そして銀貨を一枚くれたのです」

彼がふところに手を突っこんで手紙をとりだすと、王虎はいきなりそれをひったくった。ものもいわずにその路地を抜けて狭い通りに出ると、ぽつんと一軒、老人がお湯を売っている店に入り、壁の釘からさがっているたよりなげな豆油のランプの光の下で手紙をひきちぎって、中を読みはじめた。読むにつれて、彼ははっきり陰謀をさとった。彼女が――自分の妻が――誰かにたいしてすでに彼の銃の

秘密を明かしている！　そうなのだ、彼には女がすでに誰かに会って秘密を知らせたことがわかった。そしてこの手紙には彼女のさいごの命令が記してあるのだった。こう書いてあったのだ。

「銃が手に入ってみんなが集まりしだい、わたしも行きます」

これを読むと、王虎は足もとの大地がぐるぐる回りだし、頭上の空が崩れ落ちて今にもつぶされるような思いに打たれた。彼はこの女を心底から愛していたのだ。まさか裏切ることがあろうなどとは、夢にも思っていなかった。あの忠実な兎唇の諫言もすっかり忘れて、近ごろでは目を伏せている彼の顔に目をとめることもなく、ひたすらあの女を愛しに愛して、あとはただひとつ、子を生んでくれることだけを願っていたのである。彼は繰り返し繰り返し、折りあるごとに子供ができたかと彼女に訊いていたのだった。こうして愛に溺れきった彼は、女が心の中に謀反の志をいだくことがあろうなどとは、夢にも思ってはいなかった。今も今とて、まさにそのいとしい女のもとへ行ける時を待っていたのである。夜のその時を待っていたのだ。

だが、彼女が彼を愛していないことは、もう明らかだった。彼女は戦局が転回して大きく一歩を踏み出せる機会を彼が待っているこのときに、こんな謀反をくわだてようという女だったのだ。こんな謀反をたくらみながら、一晩じゅう彼と寝床をともにして、まだ子供はできないのかと問われれば悲しい顔をしてみせるというまねができる女なのだ。とつぜんこみあげてきた激しい怒りに、王虎は息もつけなかった。腹の底からこみあげてきたどす黒い怒り、そのどす黒さは彼のかつて知らないほどだった。心臓が激しく鳴って鼓動は耳にまでひびき、目はかすんでいた。しかめた眉も痛いほどだった。

甥は彼のあとについてくると、戸口の暗がりに立っていた。だが、王虎はものも言わずに彼を払いのけた。怒りにまかせて突きのけたきり、甥が無残にも道路のかたい石畳の上に叩きつけられたことにさえ気がつかなかった。

彼は怒りにわれを忘れて、飛ぶように邸内へもどって行った。歩きながらすでに剣を、あの豹から奪ったみごとな剣の鞘をはらって、刀身を自分の腿で拭っていた。

女が寝床に横になっている部屋に入ってみると、暑さのために帳はあけたままだった。女は身を横たえている。すでに満月が中庭を囲む塀の上にのぼって、その光が寝床の上の女を照らしていた。女は涼をもとめて裸のまま身を横たえ、両腕を投げだしている。片手はだらりと寝床の端に伸びて半開きになっていた。

だが王虎は一刻の猶予もしなかった。彼女の美しさは疑いようもなかった。月光を浴びたその姿は大理石のように見えた。燃えるような怒りの下には、死よりもなお辛い苦

しみのひそんでいることもわかっていた。だが彼はためらわなかった。一瞬彼はこの女が自分にしかけた罠を、自分を裏切ろうとしたことを意識的に思いだし、それを力にして剣を振りあげると、枕の上でこちらを向いている女の喉もとを一突きで刺した。さらに一回強くひねると、抜きとって絹の掛け蒲団で拭った。

彼女の口からは一声声が洩れたが、それも血にとざされて何を言ったのかわからず、身をもがく暇もなかった。わずかに剣が喉に突き立てられたとたん、四肢をはねあげ、目を大きく見ひらいただけだった。それきり彼女は死んだのである。

だが、王虎は立ち止まって自分のしたことを振り返ろうとはしなかった。そのままつかつかと中庭へ出ると大声で人を呼び、駆けよってきた部下に向かって怒りに燃えた言葉も荒らく有無をいわさぬ命令をくだしたのだ。いまや一刻の猶予もなく鷹の救援に向かい、盗賊に先んじて銃を確保しなければならない。彼は二百人だけを兎唇の指揮下にのこすと、あとはすべての兵を率いて出発した。

門を出ようとしたとき、欠伸をしながら寝床から出てきた老人が、とつぜんの騒ぎに呆然と目を見張っているのを見て、王虎は馬上から大声で言った。

「おれの寝室にころがっているものがある！　担ぎだして運河か池に放りこんでおけ！　おれがもどるまでにかならず片づけておくのだ！」

それきり王虎は怒りを胸に、昂然と身体をそらせて馬を駆った。だが胸の中は、心臓からしたたる血が腹の中までひろがって行く思いだった。どれほど意識して怒りをかきたててみようとしても、ひそかに心臓からしたたる血の流れは止めようがなかった。彼はとつぜんやりきれない呻きを洩らした。だがそれも、埃を蹴立てる重い蹄の音にかき消されて、誰一人聞いたものはいなかった。いや王虎自身さえ、自分が繰り返し呻きつづけていることに気づいてはいなかったのである。

その夜から翌日一杯、王虎は鷹の姿をもとめてそのあたり一帯を放浪した。風がなくなったおかげで熱い太陽は彼らをじりじりと焼いた。だが心の中に休むことを知らないものをかかえている王虎は、部下を休ませようとしなかった。そしてもう日が暮れようというころ、南北に走る街道で、とぼとぼ歩いている兵の先頭に立っている鷹に出会ったのである。はじめ、王虎には果たしてそれが自分の部下たちなのかどうかの見きわめもつかなかった。鷹が王虎の命令どおり兵士たちにぼろの下着を着せ、頭には手拭を巻くというかっこうをさせていたからだった。王虎は彼らがそばまできて、はっきり顔が見えるようになるまで待たなくてはならなかった。

だが、ようやくたしかに部下だということがわかると、王虎は赤毛の馬を降りて道端に生えている棗の木の下に腰をおろした。内心の苦しみのために疲労しきっていたのである。こうして彼は鷹が近づくのを待った。待っているうちに、自分の怒りが消えてしまうのではないかと不安になった彼は、むりやり、罠にはまったのだということを必死で思い出そうとした。だがその苦しみと怒りの真の原因は、すでに女が死んだというのにまだ愛している、という事実にあったのである。殺したことに満足はしていた、だが、今なお彼女を慕う愛の情熱は変わっていなかったのだ。

怒りに燃えたこの苦悩のために、彼は不機嫌になっていた。だから鷹がそばにきても、ろくろく目を上げようともせず、あの眉の下で目を伏せたまま、呻くように言ったのだった。

「どうだ、銃はとりにがしたろう！」

だが鼻のとがった鷹はなかなか能弁だったし、すぐかっとなる誇り高い気性の持主でもあった。彼は上司への礼儀などかなぐりすてて、ずけずけと答えた。

「まさか匪賊どもが銃のことを嗅ぎつけているとは、わかりっこないからね。奴らは密偵か何かから、おれたちより先に聞いてたんだ。先まわりをされたんじゃ、どうしようもないじゃないか？」こう言うと彼は銃を地面に叩きつけて腕組みをし、反抗するように上司をにらみつけた。小言を言われる筋はないという態度である。

王虎もまだ道理はききわける余裕はあったから、うんざりしたように腰を上げると、ごつごつした棗の木にもたれかかり、口をひらく前にまず剣帯をはずしてしっかり締めなおした。だが、やっと口をひらいた彼は、威勢のわるい声でじつにいまいましげに言った。

「これで、大切な銃はみんな消えてしまったわけだ。奴らと一戦をまじえてとりもどさなくてはならん。こうなったら、やるぞ！」彼は我慢がならぬというように身体を揺すると、唾を吐いて気力をふるいおこし、力をこめて言い放った。

「奴らをみつけてぎゅうぎゅういわせるのだ。おまえたちの半数が死んでも、それはそれまでのことだ。おれにはどうすることもできん！　銃はとりもどさねばならんのだ。たとえ一梃の銃のために十人の兵を失っても、そうなったらまた、一梃の銃につき十人の兵をみつけるまでのことだ。銃にはそれだけの値打がある！」

こう言うと彼はふたたび馬にまたがり、あたりの柔らかな草を食べようとしきりに前後にはねる馬を、力ずくでしめつけた。鷹は突っ立ったままむっとした表情でこれを眺めていたが、ついにこう言った。

「匪賊のありかなどはたいてい見当がついている。昔の山塞にくりこんだのだ。銃もみんなあそこへ運びこんだ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.